



## ○たたら侍

春季写真コンクール分校生徒出品写真「快晴」⇒

オープンセットが雲南につくられ、映画たたら侍が撮影されたのは記憶に新しいところですが、私は、たたら製鉄によりつくられた鉄の運搬・商売がどのように描かれるのかに関心を寄せて観ました。劇中、鉄を馬に乗せて旅立ち盗賊に会うシーンがあります。当時は途中から斐伊川を使って杵築(大社)へ、さらに日御碕の宇竜から若狭まで船で運び、鯖街道を陸送したのち、琵琶湖を使って近江坂本などに陸揚げして京などに運び込まれていたようです。商人がたたらを求めて村まで来る話になっていましたが、このルートで来たのでしょうか。映画でも船のシーンがありました。



水運・海運が略奪の可能性が低く重いものも大量運搬できますが、時化等で海に消える危険性があります。鉄が重要品であったことは言うまでもなく、その生産と流通を掌握することは戦国期の領主にとってとても重要でした。支配、統制、領有・戦国期はその形態が複雑です。戦国期の山陰の流通を調べている中で、未解明なことが多かった掛合や私が住む平田の多賀氏を調べたことがありました。

『出雲国風土記』によると、飯石郡には7つの郷がありました。熊谷郷、三屋郷(三刀屋町三刀屋など)、飯石郷(三刀屋町多久和など)、多禰郷(掛合町多根、松笠、掛合、入間など)、須佐郷、波多郷(掛合町波多など)、来嶋郷です。分校のある多禰郷は、中心が現在の多禰(多根)から掛合に移ったことによるのか、戦国期にはしたいに掛合郷と呼ばれるようになりました。この地を掛合多賀氏や広島から進出してきた日倉山城の多賀山氏が治めていたようです。『掛合町誌』によれば、以前この日倉山城主を多賀山氏ではなく、多賀氏と記した文献が出たため、多賀氏と混同が生じたようです。そのためか、未解明なことが多くなったようです。

多賀氏の所領あるいは權益を有する地に目を向けて見ると、多禰郷、多久和郷、立原(加茂)、平田(出雲)、長田西郷(松江)・赤江郷(安来)などで、すべて流通を考える上で大事なところですが、山陰・山陽を結ぶ出雲備後路を通り多禰郷から多久和郷を抜けると、斐伊川と交錯する結節点に出ます。ここには来次(木次)市場がありました。そこを抜けると加茂町立原付近を通り宍道に出ます。宍道湖の西の結節点が平田であり、東の結節点が長田となります。また、飯梨川(旧富田川)河口にある赤江郷は、尼子氏の居城である富田城と中海とを結ぶ交通の要衝にあたり、尼子氏や有力領主にとって重要な地でした。そのためか、多賀氏は反尼子勢力のような存在だったようです。

掛合の多賀氏は、その後出雲の塩冶氏とともに尼子氏に敵対して没落。離反し没落した掛合の多賀氏と両翼をなす平田の多賀氏も、おそらく同じ頃に尼子氏から離反したと思われます。多賀山氏は、1442年の大内氏の出雲侵攻の時に終始大内方として戦うなど、これまた反尼子勢力だったようです。

その後の平田では、商人の記録として、次のような史料が残っています。「永禄12年(1569年)平田の目代(代官)等は、平田商人たちは三刀屋に出向いて商売をしているが、従来からの約束通り来次(木次)には行っていないのに、来次(木次)商人が逆に平田の海辺の村に来て商売をして困っているため、杵築(大社)の商人連合に調停を申し出た」というものです。このやりとりについて専門家は、「杵築商人連合が広域な地域経済圏の中心に位置して平田商人を統制下においていたこと。そして逆に来次商人は、そうした枠組みから離脱し成長していこうとしていた」とことがわかるとされています。

たたら侍や史跡もそんな歴史的背景を知った上で見ると、また違ったように見えるのではないのでしょうか……。